

1. 活動日時

令和5年5月11日(月)9:00-17:00

2. 活動場所

正院小学校避難所、正院町周辺の在宅避難者宅

3. 被害状況 (5月11日8時30分時点)

- ・人的被害：死者1名、重傷2名、軽傷35名
- ・住宅被害：全壊15棟、半壊13棟、一部損壊512棟

総務省消防庁 石川県能登地方を震源とする地震による被害及び消防機関等の対応状況 (第15報)

4. 天候

晴天 最高気温17℃ 最低気温6℃

5. 活動の実際

9:00 保健医療福祉調整本部会議に参加した。

【前日の課題共有】

- ・ 避難所3か所のうち2か所を閉鎖。1か所（正院小学校避難所）となった。
- ・ 正院小学校避難所の避難者は、最大13名となった。
- ・ 入浴サービスは、月・水・金の14時となる。近隣の入浴施設がポンプ不良にて、車で20分の入浴施設に変更され、入浴時間が30分に短縮となった。
- ・ 個別訪問予定者201名中不在37名であった。未訪問者は93名。本日個別訪問予定者が追加となり今後の個別訪問者数が計300名となる。
- ・ 県保健師の巡回用電話の連絡先が2か所となる。県保健師からも巡回チームに連絡する時があるので対応する。
- ・ 本日より個別訪問件数の報告がQRコードによる入力方式になった。
- ・ 本日より罹災証明書も配布し、無理なら写真の添付が不要である説明を行うことになった。
- ・ ボランティア受付が開始となった。

9:50 【小学校避難所環境整備実施】

日中の避難者は、4名であった。換気、トイレ・床掃除、ウレタンマットの評価、食品の整理、ごみ集め、机の移動、湯沸かし器の整理、環境アセスメントチェック表の検討を実施した。

【小学校避難所環境アセスメント】

テント外にある段ボールベッドに設置しているウレタンマットは、養生テープで固定されていたが、全て剥がれていた。一方でテント内の段ボールベッドに設置しているウレタンマットは、テント側に垂れ下げてしっかりと固定されていた。そのため、新規者にはテント内の固定方法で設置していくように行政スタッフと確認を行った。

12:30 食品置き場が分散していたため、1か所にまとめ整理した。また、湯沸かしポットが6台設置されていたが、未使用の物もあったため、節電と有効利用のために3台に減らした。設置してあるスリッパは、やや滑りやすく、掃除を行っている際には避難所内にスリッパの足音が響いた。転倒リスクがあるため、滑り止めスリッパやクッション性があり足音が響きにくいスリッパ等の必要性を考えた。

【巡回の活動】

独居高齢者宅を巡回し、震災前後の体調、生活の変化、家屋の被害の確認とボランティアの説明等を実施した。本日より連日の晴天となるため、片付け作業による脱水が考えられたので、予防のチラシとペットボトル（500ml）の水分を配布した。午前中6名、午後4名の計10名を訪問し、2名は不在であった。訪問した高齢者宅の中には、一部家屋の損傷があり、片付け作業が必要であった。余震の不安はあるものの、どの方からも今後も自宅で生活していきたいという意志が感じられた。

15:00 健康増進センター到着

- ・週末に必要な出動人員の調整を行うため、県保健師に週末の訪問件数と支援者チーム数の確認を行った。日曜日まで、残りの訪問予定件数は300名であった。現在10チームで1日100名の訪問ができています。現在のペースでいけば、週末に目標に到達できそうであるが、週末にかけて4チームが減少する予定であるため、人員は多い方が良い。
- ・健康増進センター保健師の週末の休息についてセンター長に伺った。センター長は「週末勤務は継続するが、県より保健所長も調整会議に参加するようになり、自身の負担は軽減されている。順次スタッフには休息がとれるようにしている。」と返答あり。
- ・日本災害看護学会本部調整に報告し、週末2チームでの出動を検討した。

16:00 ・県保健師に個別訪問内容の申し送り

- ・外部支援看護師と避難所衛生管理チェックリストの作成

17:00 活動終了

6. 考察

避難所での衛生管理については、避難者が高齢であるため自ら行うことは困難であり、支援者及び行政職員が担い手になることが考えられる。また、毎日、同じ内容で支援を継続していくために、避難所衛生管理チェックリストを外部看護師と協働のもと作成した。チェックリストを活用しながら有効性について検討が必要である。巡回活動で訪問した独居高齢者は、度重なる余震で不安を抱えていたものの、日常でも多少の不自由さがある中で生活をしてきたため、災害時でも少しのことでは動揺しないと落ち着いている様子が伺えた。そのため、表面的な様子から個別訪問判定を「今後の支援が不要」と判定してしまうと、強い地震が生じた際に、犠牲につながるリスクが高くなると考えられる。本人の意思を尊重し、自宅での生活が継続できるように支援を行うと共に、危険リスクを回避するための視点での見守りが必要であると考えられる。

明日で発災から1週間が経過し、被災地内の行政職員等の疲労蓄積が考えられる。週末の動向を確認し、それに対応する外部人員を調整し、現地行政職員の休息を図りながら、未訪問の高齢者の早期把握が必要である。

7. 課題

- 1) 避難所での統一した衛生管理の継続
- 2) 独居高齢者の危険リスクの高まる中での生活への見守り支援の継続
- 3) 行政職員の負担軽減と個別訪問者の目標を達成するための週末の人員配置の増加

8. 参考写真



ボランティアセンター開設



個別訪問の様子